



10 土田麦僊 罌粟





〈左幅部分〉



〈右幅部分〉

10 土田麦僊 罌粟

昭和四年(一九二九) 絹本着色
本紙各一六一・〇×一〇六・二

対幅

竹内栖鳳の門下として修行した土田麦僊(二八八七―一九三〇)は、師と同じく写生を何よりも重要視していた。本図の制作にあたっては、わざわざ全国各地をめぐって自分の意にかなう罌粟を探し、また自宅でも庭一面に罌粟を植えたとの話もあり、本図の草案として何枚もの罌粟のスケッチが残されている。

「麦僊はこんな下手な線より引けんのかといわれたらいややかな」というのが口癖で、下書きにおいて幾重にも線を引き重ね、そこから徹底して余計な線をそぎ落として、最終的に対象の本質をとらえる一本の線のみを残すという、非常に緊張感のある作画態度であったという。そうした行程で完成した土田の絵は冷たく静まりかえった美しさがあり、この絵を見た竹内門下の先輩西村五雲は「頭よさが芥子の一本に現れている。一本の芥子が既に構成を成している」と激賞している。

土田は、もともと帝展の出品作家であったが、大正七年に小野竹喬らと新しい日本画の創造を目指して国画創作協会を結成し、同志達とのヨーロッパ遊学を挟んで精力的に展覧会(国展)を開催した。しかし財政上の理由から運営が困難となって昭和三年に解散し、土田はその翌年から帝展へ復帰した。本図はその復帰第一作目となる意欲作で、「凡庸な花鳥画中で光彩を放つてゐるもの、随一」など高い評価を受け、さらに宮内省の買上となることで土田の帝展復帰を飾った。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花ひらく個性、作家の時代―大正・昭和初期の美術工芸

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 50

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十二年三月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections